

2018年3月10日発行

幼児期の多文化環境が育む芸術表現 ～作曲家 H. カウエルの事例に見る

大 竹 紀 子

相模女子大学紀要 VOL.81 (2017年度)

幼児期の多文化環境が育む芸術表現 ～作曲家H.カウエルの事例に見る

大 竹 紀 子

Multicultural Upbringing and Childhood Expression --Early Life of the Composer H. Cowell

Noriko OHTAKE

Abstract : Henry Cowell (1897-1965) undoubtedly was one of the most influential figures in the history of American avant-garde music. His most famous contribution was the invention of two experimental piano techniques called string piano and tone-clusters. He succeeded in introducing contemporary American music to international scene through his writings and publication of scores. He challenged to integrate the elements of world music with avant-garde concepts in his compositions. He was a pioneer in modern enlightenment, especially as a teacher of John Cage. And astonishingly, in all of the above aspects, one is able to find his associations with many other cultures and musics. This study will discuss Cowell's early years and the correlation between his upbringing and his originality. Cowell grew up in an especially unusual environment, and from the early years, he had friendly relationships with Asian people residing in the US. His uniqueness possibly was nourished through his multi-cultural and this rare background. He also became one of the study cases for the famous psychologist Lewis M. Terman. In the end, the study will observe how he inevitably became a "world-citizen of music."

Key Words : Henry Cowell, 20th century music, American avant-garde, multi-culture, childhood art expression

1. はじめに

ヘンリー・カウエル Henry Cowell (1897-1965) は、弟子のジョン・ケージとともに20世紀の多くの芸術家に影響を与えたアメリカ前衛音楽におけるパイオニアの一人である。最も一般的に知られるカウエルの功績は2種類の実験的ピアノ奏法、トーン・クラスタと内部奏法を編み出したことであろう。他に楽譜出版や著述活動を通して現代アメリカ音楽の普及に努めたことや、教育、団体活動を通じた啓蒙活動などが挙げられる。

さらにカウエルの功績の一つとしてワールド・ミュージックと前衛音楽の融合を試みたことがある。専門的な音楽教育を受けなかった¹カウエルは30歳を過ぎてからベルリンに留学し、著名な音楽学者エーリッヒ・ホルンボステルのもとで非ヨーロッパ音楽について研究を行った。この経験はニューヨークのコロンビア大学やニュー・スクール・フォア・ソシアル・リサーチなどでの「世界の人々の音楽 (Music of the World's Peoples)」と題したレクチャーにつながる。世界の音楽についてのエッセーなども数多く書き、最終的には自身の音楽を混成音楽

(hybrid music) と呼ぶようになった。

カウエル音楽はベルリン留学前から日本との関わりが深かった。現代音楽の旗手ケージが日本の禅などアジアの思想から前衛思考の着眼点を得ていたことは広く知られているが、ケージの最も直接的で重要な先駆者が師のカウエルであった。カウエルは16歳のときに在米の日本人詩人、菅野衣川と出会い、クラスターを用いた最初期のピアノ作品《創造の夜明け (Creation Dawn)》を作曲している。その後、尺八奏者の玉田喜太郎、箏奏者の唯是震一らと交流をもち、米国人として初のこれら邦楽器のための作品も書いている。

戦前・戦後を通してカウエルが示した、単なるジャポニズムに留まらない、日本文化への純粋な興味には驚嘆すべきものがある。そして、カウエルの日本文化に対する真摯かつ熱心な接し方から考えると、日本以外の文化に対しても壁を築かずにいたことは想像に難くない。実際にカウエルは雅楽の響きをオーケストラで表現した《オンガク (Ongaku)》や2つの《箏 コンチェルト (Concerto for Koto and Orchestra)》などの日本的な作品に加え、《ペルシャ・セット (Persian Set)》《イランへのオマージュ (Homage to Iran)》《交響曲第13番“マドラス” (Symphony No.13 “Madras”)》《カルテット“ユナイテッド” (Quartet “United”)》などワールド・ミュージックを取り入れた作品を数多く送り出した。

[米国の] 中部、東部に住む人々の多くは日本や中国の音楽はアメリカ音楽の一部だということに気づいていないのである。アメリカ人作曲家として私は東洋の音楽から大きく影響を受けたことを指摘しておきたい。我々はヨーロッパ大陸の音楽を重要視しすぎてきたと感じる。我々は東洋の優れた音楽も理解すべきなのである。ヨーロッパの国々がそうであるように、東洋の音楽の伝統も国によってそれぞれ異なっているのである²。

20世紀に入った直後の米国において、偏見をもたずに様々な人種と交流ができたことは、おそらくカウエルの両親のリベラルな考え方に因るところであろう。開かれた環境で育ったからこそ、因習に閉じこもらない芸術表現へと繋がったのではないだろうか。

カウエル音楽の検証を通して、他文化への寛容と理解、多文化の受容がカウエルに前衛性、つまり自由な精神と解放をもたらしたのではないかと問いか

けたい。そしてこの態度は幼少期から培われたものである。小論ではカウエルの幼児期から児童期の育成環境と教育環境に焦点をあて、カウエルがどのようにして伝統にとらわれない思考を獲得していたか考察する。カウエルが示唆する実験的な音楽の存在意義をこのテーマを通して確認し、20世紀の前衛音楽が非西洋的なものを取り入れたことにより革新的な芸術と成り得たとして議論を終わらせるのではなく、そこにある姿勢が現代の我々に提言しているものを探し求めたい。

2. 幼少時の家庭環境

ヘンリー・カウエルの母親クララ (クラリッサ)・ディクソンは1851年イリノイ州に生まれ、イングランド、スコットランド、アイルランドの血を引く主に農業を営む家庭で育った。アイオワ州における最初の結婚では男児をもうけ、小学校の教師として働いていた。結婚は破綻し、1890年にカリフォルニア州サンフランシスコへ単身移り著述業で身を立てるようになる。その頃、雑誌『リバティー』に寄稿した「親と子どもの関係性 (Relations Between Parents and Children)」と題したエッセーでは自身の教育概念について、当時の女性としては先端的な無政府主義や福祉の理念と結びつけて書いている。

子どもはまだ知識が不足しているため同等自由から妨げられている不調和な存在なのです。

彼等の成長プロセスを早めるということは、社会的勢力の平等化に寄与することを意味します。精神の解放は成長に重要です。彼等は自由とされていなければならず、それは彼等自身の安全と他者の自由と共存していなければなりません。

[中略]

子どもは親の不正確な会話から学びます。ブギーマン (注：子どもを懲らしめる霊) や中国人、黒人、鞭をもったサンタクロース。こういった話が臆病心、民族間の憎しみ、そして嘘を生むのです³。

クラリッサはサンフランシスコの雑誌『アンファン・テリブル』の共同編集者であったアイルランドからの移民ヘンリー (ハリー)・カウエルと出会う。そのときクラリッサは40歳、ハリーは26歳であった⁴。

ヘンリー・カウエルの父親ハリー⁵は1866年アイルランドのクレア州に生まれた。カウエル家は北

アイルランドの君主を祖先にもつ古くからの民族の一つである。ダブリンのトリニティー大学に通うが、父親の再婚相手と折り合いが悪く、弟のディックと共にカナダのヴァンクーヴァーに農地を入手し、その後、より都会的で文学的土壌のある生活を求めて米国西海岸に移る。詩人として活動を始め、アンブローズ・ビアス、ジョージ・スターリング、メリー・オースティンら当時の新進文学者たちと交流をもつようになる⁶。

クラリッサとハリーは1893年2月25日カリフォルニア州に婚姻届けを提出した。メンロ・パーク⁷のハーキンス・アヴェニューに土地を購入し自力で祖末な小屋を建てる⁸。そして、1897年3月11日にヘンリー・ディクソン・カウエルが生まれた。

ヘンリーはサンフランシスコのスコッチ・クラブから「市の最も美しい子ども」として表彰された⁹。クラリッサは最初の結婚における育児からの教訓を活かし、「安全と共存した自由」をヘンリーに与えようとした。ヘンリーが身につけるものはヘンリー自身が選んだピンク色のものに統一し、自分で洋服を着られるようになると、「女の子のようにきれいなドレス」を身につけたいという願いを受け入れた。クラリッサによると2歳で272語を話し、「財産権」について説明を受けると物質的固執を捨て、まわりに何でも与えるようになった¹⁰。

カウエル家は様々な文学者と交流をもったが、中でも小説家ジャック・ロンドンとの出会いは強烈であった。当時、溝掘り作業員として働いていたロンドンは偶然の出会いからカウエル家に入出入りするようになる。ヘンリーは「子どもに優しく、子どもから理解される」大人として魅力を感じていた。また、社会主義的作風で知られた小説家アンナ・ストランスキーはカウエル家と近所づきあいをしていた。

クラリッサとハリーは、ハリーの夢見がちな性格や、クラリッサの伝統的な女性の役割から距離を置こうとする考えから、徐々に気持ちが離れるようになる。ヘンリーが3歳の頃にサンフランシスコに移った際には、ハリーはほとんど家にいなかった。ハリーはフランス系の歌手ヘンリエッタと一緒に住むようになり（ただしクラリッサとヘンリエッタは友情で結ばれ、ヘンリーもヘンリエッタを慕うようになる）、1903年12月、ヘンリーが6歳のときに両親は離婚を決意。親権はクラリッサのものとなり、ハリーは養育費を支払うことに同意した¹¹。

ヘンリーの音楽に対する興味は幼い頃から明白であった。クラリッサは米国中西部の民謡を歌い、ハ

リーはアイルランドの民謡を歌って聴かせた。最初に手にした楽器は近隣の知り合いから贈られたマンドリン・ハープであった¹²。5歳のときにシルヴィア・ホルムズとヴァイオリンを学び始め、すぐにシルヴィアの父親ヘンリー・ホルムズの指導を受けるようになった¹³。ホルムズは1839年に英国で生まれ、ロンドン・ロイヤル・ミュージック・カレッジで教鞭をとっていたヴァイオリン奏者であった。ホルムズにとってシューベルトもシューマンも「モダン音楽」であり、基本的に18世紀までの音楽しか教えなかった。ヘンリーは「ヴァイオリンをあきらめ、家にピアノもなかったから、作曲家になることにした」¹⁴のであった。

8歳のときにヴァイオリンのレッスンをやめたヘンリーは、自分で作曲の勉強を始める。その方法は、まず頭の中に音を聴き、聴いた音を感じるというものだった。9歳の頃からは毎日1時間ずつ机に座り、そのような「練習」を行った。心と感情は同時に存在し、勉強することによって「感じる」ことが深まり、創造のプロセスが研ぎすまされると、その頃すでに悟っていたと語っている¹⁵。

1906年4月18日、ヘンリーが9歳のときにサンフランシスコ大地震が起き、街のほとんどが崩壊する。5月にクラリッサはヘンリーを連れて故郷アイオワを目指し、中西部から北東部を転々とするようになる。8月にクラリッサの（最初の結婚の）息子クラレンスが住むアイオワ州デモインに辿り着き数ヶ月を過ごす。ここでヘンリーは初めての作品《波（The Waves）》を作曲する。作品についてはクラリッサからハリーへの手紙、ヘンリーからハリーへの手紙に語られている。《波》はウィリアム・リヒテンヴァンガーによるカウエル作品カタログの第1番となった。26小節の鉛筆書きによる自筆譜が残っており、曲はヘンリー自身が書いた詩に旋律のみをつけたもので、詩は「しぶきを飛ばす波よ／日々ほえるようにあれ」¹⁶と、サンフランシスコの海を思い起こす内容となっている。

3. 幼児期の異文化交差

ヘンリーが6歳の頃に、クラリッサとヘンリーはサンフランシスコのラグナ・ストリートに居を構える¹⁷。ヘンリーが1963年に書いた「東洋の音楽（Music of the Orient）」というエッセーにこの頃の生活について書き記している。

私はサンフランシスコに生まれ育った。私たちは日本人街と中国人街の間に住み、5歳から9歳ぐらいの日本人と中国人の遊び友達がたくさんいた。私は彼らの言葉で彼らの民謡を歌った。ちょうど東端の海岸近くの子ども達が遊び友達から学んだドイツやフランスの歌を歌うのと同じように。9歳の頃まで、私にとってこういった東洋の人々の音楽は他の音楽と同じように自然に存在していたのである¹⁸。

またヘンリーの妻シドニーの記録によれば、ヘンリーはこの頃、日本人、中国人、タヒチ人、フィリピン人の子どもらと遊び、彼らの歌遊びを一緒にを行い、日本人の家では箏の演奏を聴いていた。インドから政治的に亡命してきた著名な音楽家は部屋にヘンリーを入れて演奏を聴かせた。ヘンリーはしばしば一人でチャイナ・タウンを訪れ、クラリッサは治安の悪さを心配しながらも、目的は音楽を聴くためだと確信していた。ヘンリーは実際、中華料理屋の上階から聴こえてくる中国人音楽家による伝統音楽の演奏を歩道の縁に座りながら聴いていた。ヘンリーが初めて聴いた“オペラ”は中国の歌劇で、誰もヘンリーに、西洋の音楽は他より優れているとは教えなかったのである¹⁹。

ヘンリーが1961年に書いたエッセー「ある作曲家の世界 (A Composer's World)」では、ヘンリーが他の西洋音楽の作曲家たちに比べ、非ヨーロッパ音楽の研究に時間をさいたのは、「ヨーロッパとアジアの中間にある」北米の太平洋岸に生まれ育ったからだろうと言っている。そこではアメリカ人としてヨーロッパの伝統の限界より広い所に精神を置くことが自然なことと思えた。世界の音楽には人類のイマジネーションとヴァイタリティが無限に存在していた。「音楽的なイマジネーションの偉大な海」はヘンリーにとっては自然に継承されたものであり、「音楽体験の多様性」²⁰は現代の音楽の一事実であった。そして、作曲プロセスにおいて、世界の音楽にそれぞれ特有のスタイルが重要だったのではなく、異なる「組織構造のタイプ」²¹から示唆を得ていた。旋律やリズムや多声部的な音楽などから素材を「発見する」ことがインスピレーションの源となった。

アジアもアメリカも、アフリカもヨーロッパも、古いものも新しいものも、そして伝統的なものも実験的なものも、全て分析に値し、分析を行うことによって多様な旋法の原理に気づくことができる。そしてそれが調性音楽の可能性を広げることにつなが

る。調性的な旋律がどのように定義づけられ拡大されてきたのか、それに基づいた対位法や和声がどのように派生してきたのか知ることができる。またインド、アフリカ、ペルシャ、インドネシアのリズムを分析することにより新鮮な技法を発見することができる。単旋律においてもマルチ・リニアなものにおいても、リズム構造の創造的な使用に活かすことができる。ヘンリーにとって多文化的な体験はエキゾチックな雰囲気を楽しむのではなく、具体的な作曲技法に結びつくものであった²²。

ヘンリーがサンフランシスコに住んでいた時期、1900年から1909年頃にかけてサンフランシスコでは、日系人によるビジネスが90件から545件に増えるなど大きく発展していた²³。サンフランシスコはアジアからの移民が最も多く入国した港町であり、当時、全米で最大の日系人人口を誇っていた。1905年に日本が日露戦争で勝利を取めると、日系人への反感が高まり、1906年の大地震後の社会的不安も相まって、サンフランシスコ教育委員会は日系人の子どもを隔離された学校に通わせることを通告する。1908年には米国と日本政府により「紳士協定」が結ばれ、日本人移民の入国は大幅に制限されることになった。ヘンリーが日本人や中国人の子どもらと遊んでいたのは、東洋系移民が社会的に認知されたとはとうてい言い難い時代であったのである。

クラリッサは著述活動の収入が安定してきたため、1905年、ヘンリーが8歳のときにメンロ・パークへ戻ることにする。ヘンリーは「アジア人の遊び友達にさようならを言わなくてはならなかった」²⁴。

4. ホーム・スクーリング

ヘンリーはメンロ・パークにおいてロス・ミタス小学校の区域に住んでいた²⁵。クラリッサは前述(2.を参照)の「親と子どもの関係性」において「子どもの教育は無能な親が教会と政府にそれを委ねることによって実際に放棄されているのです。政府は保護者から金を盗み、政府の意志のままに子どもを指導することにより、盗みによる権力を持続させているのです」²⁶と主張しているように、国家権力による教育を強く疑問視していた。そして、教師の「神様の思し召し」などというごまかしよりも、「1個のオレンジが彼の小さな手よりも大きいということは、それを自分の手でつかもうと努力しないと分からないことなのです」と言うように、真実は自然の多様性の中から子ども自身が学ぶべきであるとい

う信念を持っていた。しかし、現実にクラリッサ自身の著述活動のために時間が必要であったこと、ヘンリーが同年代の子ども達と交わる必要があるのではないかと考えたことから、ヘンリーをロス・ミタス小学校へ入れることにした。

体は小さいが語彙が豊富で、髪をのばすなど外見も周囲と異なっていたヘンリーはすぐに激しいじめの対象となった。カウエルの妻シドニーの記録によると、ヘンリーは学校生活の1週目から髪を切られる、首にロープを巻かれて連れ回される、顔を殴られるなどの行為にさらされた²⁷。クラリッサはヘンリーを学校から遠ざけ、家で教育を行うことにする。以降、ヘンリーは1906年の大地震をきっかけに各地を放浪する間、アイオワで9歳から10歳になる4ヶ月間登校する以外、通常の学校教育を受けることはなかった。アイオワでは決められた指導内容を超えて読書を進めようとするヘンリーを止める教師や、ピンクと茶色を塗り重ねようとしたヘンリーを家に返した教師などの態度²⁸からクラリッサの学校への疑念は深まるのみであった。

クラリッサの家庭における教育では、ヘンリーは興味を感じた分野のみを勉強すればよかった。地域の図書館では子どもが読むふりをしているだけだと信じた司書が大人向けの部署も開放してくれた。切手の収集にもものめり込み、そこからは地理や歴史や政治について学んだ。さらには歴史、旅行記（アラスカ、オーストラリア、チリ、中国、オランダ、アイスランド、インド、日本、朝鮮、ラブラドル、ノルウェー、パナマ）、科学（天文学、幾何学、鉱物学、自然科学、動物学、生理学）、伝記（ベートーヴェン、リスト、メンデルスゾーン）、文学（キーツ、ラム、シェークスピア）、芸術、フィクション²⁹などが学びのリストに含まれた。

1908年に二人はニューヨークに辿り着く。家計状況は最悪で日々の食事にも事欠くほどであったが、ヘンリーは無料の催し物を探し出した。メトロポリタン美術館、図書館、美しいコレクションをもつ百貨店、無料のオーケストラ演奏会などで多くを学ぶ。ヘンリーがニューヨークからハリーに書いた手紙によれば1908年10月（11歳）までに150冊の本を読み、切手コレクションは増える一方であった³⁰。後述のターマンの記録によれば、ヘンリーは14歳までに300冊の本を読み、中でも植物学に関する知識は音楽の才能にも匹敵するほどだったとされている。

5. 子ども「トイオン・クラブ」での活動

1910年ヘンリーが13歳のときに、大地震以降の放浪生活からメンロ・パークに戻ってくることになった。クラリッサは体が弱っており、経済的にも困窮状態で、ハリーの養育費も途絶えていた。ヘンリーは地域の学校の雑役、近隣の鳥小屋の掃除、山々から採取した花やシダの行商などをしてクラリッサとの生活を支えた³¹。

学校に通わず、家計を支えるのに忙しかったヘンリーはしかし、近隣の子ども達と共に「トイオン・クラブ」を結成する（注：トイオンとは北米太平洋沿岸に見られるカナメモチ属の常緑低木のこと）。トイオン・クラブでのヘンリーの役割は書記、エンターテインメント部門長、俳優であった。トイオン・クラブは毎週、近くの邸宅に集まりオリジナルの劇を演じた。邸宅の持ち主キーファー家には当時メンロ・パークで唯一のスクエア・グランド・ピアノがあった。そこで参加者たちはヘンリーがピアノで即興演奏した「雰囲気のある音楽を聴いて笑い転げた」³²のである。トイオン・クラブのメンバーでもあったアンジェラ・キーファーはアンジェラの父親が、ピアノのふたがヘンリーの腕の上に落ちてこないよう、ふたを締め金で止めていたと語っている³³。そしてヘンリーがピアノを弾きながら「今の鐘の音を聴いた？」とまわりに尋ねていたことを憶えており、これが後にトーン・クラスターと呼ばれるようになる奏法の始まりではなかったかと述べている³⁴。

アンジェラはさらに、ヘンリーが足でピアノを弾いていたことも記憶している。リクライニング・チェアに背をもたれかけながら「いつも手でやるように」足で弾く姿に、まわりの子ども達は大興奮した。そしてこういったパフォーマンスを行う際にヘンリーは音楽と同時に独自のストーリーも披露していた³⁵。“前衛”奏法トーン・クラスターは子どもの劇と描写的に関連しながら生まれたと言えるのである。

トイオン・クラブでの活動は1912年頃まで続き、ヘンリーが最初期のトーン・クラスター作品《和声の冒険 (Adventures in Harmony)》を書いたのは1913年、16歳のときであった。《和声の冒険》は6つの〈チャプター〉から成る34ページのピアノ曲で、その中の〈チャプター III、グラーヴェ・エクスプレシヴ〉に初のトーン・クラスターが現れる。クラスターは「手全体で」と記された左手によって奏され、1音1音すべて記譜されている〔譜例1〕。4分音符のクラスターはピアノニッシモで9（もしくは10）小

節間繰り返され、右手が厳かな旋律を奏でる。(自筆譜³⁶では4段目から5段目にバツ印がつけられ、その部分の真偽が定かではない。)2ページ目の中間部では「腕で」と書かれた和音が、はじめのみ1音1音の記譜で、その後は「腕の和音 (arm chord)」と省略して書かれている。最後に冒頭の旋律が戻り、左手は低音で静かに繰り返される半音階パッセージとなる。

ヘンリーは1914年3月5日、サンフランシスコのサン・フランシスコ・ホテルにおけるサンフランシスコ・ミュージカル・クラブ主催の演奏会で《和声の冒険》を披露する。ヘンリーの「プロフェッショナルなキャリア」の始まりとなる演奏会であった³⁷。『サンフランシスコ・クロニクル』紙は「地元の音楽記事」として演奏会の案内を以下のように載せた。

天才の域にあるとされている若い新人ピアニストの登場。ヘンリー・カウエル名人 (Master) はカーメルのハリー・カウエル夫妻の息子であり、すでに音楽的な素養は注目を集めている。木曜日の演奏会では彼自身の作品が披露されることになっている³⁸。

そして、演奏会の翌日にはレッドフェルン・メイソンによる「賞賛に価する地域社会の演奏会／ヘンリー・カウエルは発展の可能性を見せる才能」³⁹と題した批評が載る。ヘンリーの作品は「無法状態」で「酒神賛歌風の印象」だが「観客に受ける効果」も持っている。メイソンはヘンリーの才能を認めながらも「音楽学校で数年訓練を受けるべき」と締めくくっている。

この演奏会でヘンリーは《和声の冒険》の他にいくつか小品を弾いている。これらの小品は《創造の夜明け》となっており、それは前年の1913年7月に

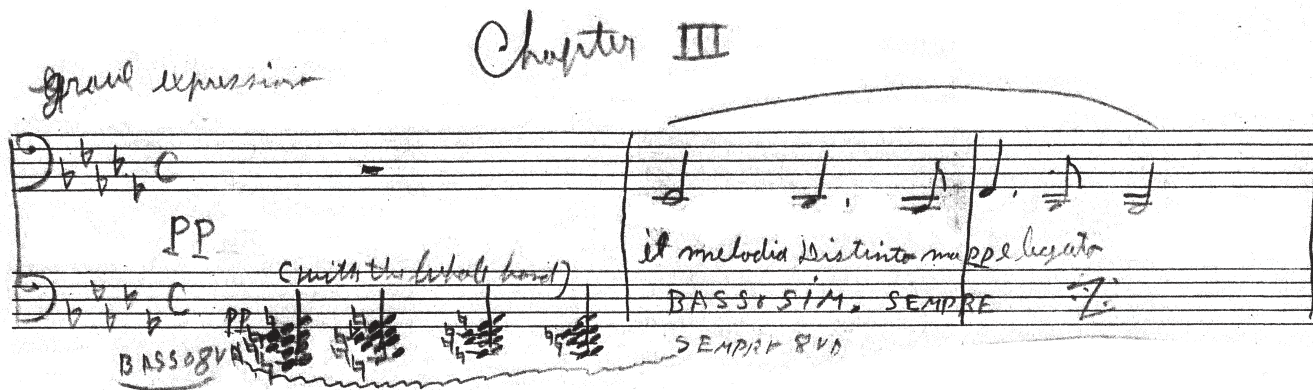
菅野衣川より依頼され、菅野の詩に付随する劇音楽として使われたものの一部であった⁴⁰。この中の1曲〈妖精の踊り (Fairys [sic] Dance)〉は演奏会の中で最も賞賛された曲であった。前述のメイソンの評によれば「非常に魅力的。リストの〈小人の踊り〉の軽やかな部分の精神に基づく」⁴¹。

〈妖精の踊り〉は2ページの楽譜、18小節から成り、自筆譜⁴²には冒頭に「ポピュラーなスタイルで」と書かれている〔譜例2〕。

テンポはプレスト・エ・デリカート・センプレ。冒頭はレガート・エ・レジーエロで右手がG音を中心とした4音をピアノニシモで繰り返す。2小節目から左が跳ねるような8分音符となり、その後右手がオクターブと半音のパターンを繰り返す。6小節目からテンポがアレグレットになり、右手がエキゾチックな響きのメロディを弾く。10小節目から冒頭のプレストが戻る。〈妖精の踊り〉は未成熟ながらヘンリーの非現実的な存在への好みを表し、その後「妖精」はカウエル音楽のモチーフの一つとなっていく。

6. IQテスト実験対象

ヘンリーがトイオン・クラブで活動していた時期、近所に住むスタンフォード大学教授で心理学者のルイス・M・ターマンと出会う。ターマンの息子もトイオン・クラブのメンバーであった。ターマンはスタンフォード＝ビネテスト (子どもの知能検査) の創始者であり、当時、各地の優秀児の調査を行っていた。対象としていた子どもは約6000名で、内600名にはスタンフォード＝ビネテストを行った。ターマンは1919年の著書『学校児童の知能 (The Intelligence of School Children)』において、「41人の優秀な子ども」という章を設け、学校の教師たち



【譜例1】和声の冒険チャプターIII mm1-3

がここに含まれる特殊な能力を持つ子どもらを実例として学べるようにした。ヘンリーはその中の「No.40」であった⁴³。

「No.40 ヘンリー」は「IQと学校教育体験が相関的に依存していない例。科学的な能力は音楽的天才性によって覆い隠されている。極限の貧困」とされている。1910年、12歳半のときから観察の対象となり、14歳半のときに行われたテストではIQ131、19歳並の精神年齢と判断された。IQの数値は特筆するほどではないが、「ヘンリーは一人しかいない（there is only one Henry）」と書かれている。

ターマンの記述は、ヘンリーが学校教育をほとんど受けていないこと、貧しい家計を支えるため働いていたこと、母親は「理想主義者で、宗教、社会学、女性の立場について先端的な考えに満ちて」いたことについて説明している。父親は「優秀な家系における失敗者」であった。

ヘンリーが6歳のとき筋肉の麻痺が起こり、それは舞蹈病（注：四肢、顔面のけいれん性の不随意運動からくる病気）であった。症状は数年続いたが14歳の頃にはほとんど完治した。母親がヘンリーを学校に行かせなくなったのはこの病気のためだったとしている。12歳になるまでに植物学の知識はすでに豊富で大学生向けの教材も読んでいた。ヘンリーが14歳になるまでに読んだ300冊以上の本のリストがあり、他にも社会主義、無神論、科学的諸問題に関して、14歳ですでに大学4年生より深く理解してい

た。しかし基礎的な教科の知識は無視されており、スペリングは悲惨で、算数は四則と単純な分数しかできなかった。

ヘンリーの外見は奇妙であり、話し方は風変わりで古風、目つきには自意識が感じられず、服装はぼろ、髪が長く、顔と肩がときどきひきつるような動きをしていた。周囲はヘンリーを変人と捉えていた。芝刈りや学校の雑用の仕事もうまくやれずにいたが、音楽の才能は貧困や病気を乗り越えてヘンリーの中に留まった。様々な労働のため手が酷使され演奏家として名を成すのはあきらめていたが、作曲家になると決意して、毎日、無数の作品を書き続けた。15歳のときに稼ぎの中から貯めた60ドルで古いピアノを買った。彼にとってはじめてのピアノであった。そして1年もたたないうちに彼の演奏はサンフランシスコ周辺の音楽家たちから注目されるようになった。

ヘンリーの最も特徴的な面は彼が何かを判断しようとする際、まったく周囲に影響されないことであった。意思は常に明確であり、周りの人々の感情を考慮せず表現していた。多くの人は彼を無礼と考えていたが、彼は自分に誠実なだけで、これは彼自身の気質と子どもの頃の環境から来していると考えられた。

ヘンリーを、不可思議なアイディアと不快なマナーを持った、遠慮のない、単に変わった子どもと捉えていた人々も、最終的には彼の音楽的な才能を認めざるをえなかった。ただし、それ



【譜例2】妖精の踊り mm1-3

でも多くは音楽的才能を別にすれば基本的には変人だとみなしていた。彼の全体的な知性は友人達からも正しく評価されることはなかったのである。

数年に渡るヘンリーとの対話から彼の科学的能力は音楽的能力に勝るとも劣らないことが分かった。しかし、ヘンリーが受けてきた教育はあまりにも変則的で大学に入学することは叶わなかった。ターマンは最後に「もし彼が音楽家として有名になるのであれば、後の伝記作家は必ず彼の音楽的天才性は自然で必然であったと記すであろう。そして科学者としての彼は忘れ去られるのである」と述べている。

7. おわりに

ターマンの記録からも分かるように、ヘンリー・カウエルは非常に特異な環境で育った。彼の特異性は多文化が作りあげたものではなく、彼の特異性の中に多文化が含有されていた。「風変わり」なヘンリーにとって、当時「普通でない」移民の文化は「風変わり」に見えなかったのかもしれない。特異性が彼をオープンにし、多文化への接触を容易にした。

世界の音楽の中には、はじめて聴くとき奇妙に聴こえるものもある。しかし、すべての音楽には豊かな価値が含まれている。当初耳障りと思われた響きも繰り返し聴くことにより美しくなり、そして少なくともそこに意味や感情があることが分かる。ある民族を知るために彼等の音楽生活を知ることほど良い方法はない⁴⁴。

「音楽の全体世界 (whole world of music) に住み、そこで創造することをどのように学ぶのだろうか。一つの技術、一つの伝統では充分ではないのである」⁴⁵と言っているように、カウエル音楽は包括的であると同時に、混成でもあった。そして、「作曲家の思考の内に本質的な段階に達した無意識の構造がなければ、究極の音楽形式は生まれない。この本質的な段階では作曲家の人そのもの、作曲家が体験してきたもののすべてが役割を果たす。そこではじめて音楽は国境を超え (be more than national)、人間として芸術家として彼は自由に、独自のアクセントをもって、しかし普遍的に、語る事ができる」⁴⁶のである。

カウエルは作曲という行為の過程に様々な世界の

音楽を科学的に取り込むことに成功したが、それは果たして幼い頃の経験なくして可能であったのだろうか。カウエルは特殊な能力を生まれ持っていたのではなく、彼の環境が彼の思考を育てた。もし今、我々が前衛音楽から新しく学べることがあるとすれば、それは、その音楽を育んだそのもの、それを取り巻く環境についてではないだろうか。環境もしくは社会が、そこに馴染まないものを受け入れたとき、新しい概念が生まれる。そういった社会を作ろうと努力しない限り、真に自由な表現は生まれ得ない。カウエルの子ども時代に示唆を得て、そのような環境づくりへ向けた一提言を可能としたい。

注

- 1 幼少期のヴァイオリンレッスン、ピアノレッスン、カリフォルニア大学バークリー校のC.シーガーとの作曲レッスン、ニューヨークのインスティテュート・オブ・ミュージカル・アート (後のジュリアード音楽院) で学んだ2ヶ月間などがあるが、本格的に長期の指導を受けたことはない。
- 2 Henry Cowell, "Music of the Orient," *Essential Cowell: Selected Writings on Music by Henry Cowell, 1921-1964*, ed. Dick Higgins (Kingston, NY: McPherson, 2001), p.188.
- 3 Clara Dixon Davidson, "Relations Between Parents and Children," *Liberty*, September 3, 1892. [Public Domain] <http://fair-use.org/benjamin-tucker/instead-of-a-book/relations-between-parents-and-children> [2017年12月1日閲覧]
- 4 クラリッサについては最初の結婚による息子クラレンス・ダヴィドソンの記憶による記録がSachs (2012) に詳しい。Joel Sachs, "Henry Cowell" (New York: Oxford University Press, 2012), pp.11-15.
- 5 父親は当時、同姓同名の名の知れた事業家であったため「ヘンリー」の愛称「ハリー」を使うようになった。小論では作曲家を「ヘンリー」、父親を「ハリー」として区別する。
- 6 ハリーについてはSachs (2012) とHicks (2002) に詳しい。Sachs, *ibid.*, pp.15-16. Michael Hicks, "Henry Cowell-Bohemian" (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2002), pp.11-13.
- 7 カリフォルニア州メンロ・パークはサンフランシスコから45kmほど離れ、1891年に設立されたスタンフォード大学からほど近い、現在のシリコンバレーと呼ばれる地域の中心地の一つである。

- 当時はアイルランド系の移民が開拓をはじめたばかりであった。参考：City of Menlo Park HP <http://www.menlopark.org/> [2017年12月1日閲覧]
- 8 ニューヨーク公立図書館にこの家の写真がある。New York Public Library for the Performing Arts at Lincoln Center, Henry Cowell Papers.なお、筆者が2016年3月の実地調査においてこのアドレスを訪ねた際、ほぼ当時と同じと思われるサイズの家がかった。周囲の家と比較してもかなり小規模である。現在はカウエル家とは関係のない家庭の住居となっている。
 - 9 Sachs, *ibid.*, p.18. ニューヨーク公立図書館所蔵の「HC 1899」(1歳～2歳頃と思われる)と記された写真においても、金髪の巻毛と、ふっくらとした頬、淡い色(写真はモノクロ)のドレスをまとった様子が見て取れる。
 - 10 Sachs, *ibid.*, p.19.
 - 11 *Ibid.*, p.21.
 - 12 *Ibid.*, p.23.
 - 13 *Ibid.*, p.24.
 - 14 “How and Why a Composer Creates” [録音資料] New York Public Library, Archives and Manuscripts, Henry Cowell Collection of Noncommercial Recordings.
 - 15 *Ibid.*
 - 16 William Lichtenwanger, “The Music of Henry Cowell: A Descriptive Catalog” (Brooklyn, NY: Institute for Studies in American Music, Brooklyn College of the City University of New York, 1986), p.31.
 - 17 クラリッサとヘンリーが住んだラグナ・ストリートとポスト・ストリートの角のアドレスは現在のサンフランシスコ・ジャパ・タウンの中心地である(建物は残っていない)。ただし、当時(1900～1906年頃)のジャパ・タウンは現在と異なる、チャイナ・タウンの端のサウス・マーケット地域にあった。1906年のサンフランシスコ大地震をきっかけに現在の場所に移った。The Japantown Task Force, Inc., “San Francisco’s Japantown” (Charleston: Arcadia Publishing, 2005), p.7.
 - 18 Cowell, “Music of the Orient,” *ibid.*, p.188.
 - 19 Sachs, *ibid.*, p.25.
 - 20 Henry Cowell, “A Composer’s World,” *Essential Cowell*, *ibid.*, p.311.
 - 21 Cowell, *ibid.*, p.312.
 - 22 Cowell, *ibid.*, p.317.
 - 23 The Japantown Task Force, *ibid.*, p.7.
 - 24 Sachs, *ibid.*, p.21.
 - 25 筆者の2016年の実地調査の際、カウエルの家からロス・ミタス小学校まで徒歩5分ほどであった。
 - 26 Davidson, *ibid.*
 - 27 Sachs, *ibid.*, p.23.
 - 28 *Ibid.*, p.29
 - 29 *Ibid.*, p.33.
 - 30 *Ibid.*, p.33.
 - 31 *Ibid.*, p.35.
 - 32 *Ibid.*, p.36.
 - 33 *Ibid.*, p.45.
 - 34 *Ibid.*, p.36
 - 35 *Ibid.*, pp.36-37.
 - 36 自筆譜はワシントン米議会図書館所蔵。Library of Congress, Henry Cowell Manuscripts.
 - 37 Lichtenwanger, *ibid.*, p.44.
 - 38 San Francisco Chronicle, March 1, 1914, as cited in Martha L. Manion, “Writings about Henry Cowell: An Annotated Bibliography” (Brooklyn, NY: Institute for Studies in American Music, Brooklyn College of the City University of New York, 1982), p.115.
 - 39 San Francisco Examiner, March 6, 1914, as cited in Manion, *ibid.*, p.115.
 - 40 菅野との出会い、《創造の夜明け》作曲の経緯については次稿に譲る。
 - 41 San Francisco Examiner, *ibid.*
 - 42 Library of Congress, Henry Cowell Manuscripts.
 - 43 Lewis M. Terman, “The Intelligence of School Children” (Boston: Houghton Mifflin, 1919).ヘンリーの項目は pp. 246-251.
 - 44 Henry Cowell, “Music of the World’s Peoples,” *Essential Cowell*, *ibid.*, p.178.
 - 45 Cowell, “A Composer’s World,” *ibid.*, p.312.
 - 46 *Ibid.*, p.320.

本研究はJSPS科研費JP26370183の助成を受けたものです。

【附表】 ヘンリー・カウエル：初期年表

Henry Cowell: Early Years

- 1897 Born in Menlo Park, California, on March 11
Father-Harry-Irish poet, Mother-Clarissa-Iowa writer
- 1900 Spoke 272 words at the age of 2
Moved to San Francisco
- 1903 Violin lessons with Henry Holmes at the age of 5
Moved to San Francisco's Asian district
Parents divorced
Came down with chorea
- 1905 Returned to Menlo Park
Attended Los Mitos Elementary School for a few weeks
- 1906 Finished violin lessons. Showed perfect pitch
(Great San Francisco Earthquake on April 18)
Moved to several locations throughout the country
Went to an elementary school in Des Moines, Iowa, for 4 months, third grade
- 1908 Arrived at New York
Finished reading 150 books
- 1909 Left New York
- 1910 Returned to Menlo Park
Because of mother's sickness, he worked to support the household
Attended Toyon Club
Became a study case of Lewis M. Terman (Stanford University)
Met the Varian family of Halcyon
- 1911 Finished reading 300 books
- 1912 Bought the first piano
Piano lessons with Edith Partridge
Performed at Pacific Musical Society
Met Samuel Seward (Stanford University)
- 1913 Composed "Adventures in Harmony" the first tone cluster piece for piano
Composed for Takeshi Kanno's vision drama "Creation Dawn"
- 1914 Piano lessons with Elizabeth Bates
Debut recital at San Francisco Musical Club on March 5
Piano lessons with Carrie Carrington
Started composition lessons with Charles Seeger (UC Berkley)
- 1916 Mother Clarissa died
Studied English literature with Samuel Seward (Stanford University)
Began writing "New Musical Resources" (published in 1930)
Belonged to The Temple of the People at Halcyon, a theosophical organization
Entered the Institute of Musical Art (Juilliard) but dropped out in 2 months
- 1917 Returned to Menlo Park